The Japanese Society of Gastroenterological Surgery

PP217107　幽門狭窄非根治例に対する半空置的胃空腸吻合術

山岸文範[1]，湯口　卓[1]，大西康晴[1]，新井英樹[1]，塚田一博[2]
(糸魚川総合病院外科[1]，富山医科薬科大学第2外科[2])

目的：胃癌，膵臓癌に対する各種バイパス術の検討を行った．方法及び結果：対象症例17例（胃癌14例，膵臓癌3例）．A) 8例に胃空腸側側吻合術を施行．うち4例が術後経口摂取不良．B)3例に空置的胃切除術を施行．経口摂取は良好であったが，幽門部へのチューブの留置がQOLの障害となった．C)最近の4例に，小弯側を1～2cm残し幽門部を切離し，胃体部と空腸を側側または後壁吻合する半空置的胃切除術を施行．経口摂取は術後1週間前後から可能であり，小皮膚切開，かつ短時間で行えた．まとめ：少数例の検討だが，経口摂取，術後のQOL等の点から半空置的胃切除術は，試みるべき手術と思われる．メタリックステントによる狭窄の拡張を試みた症例も含めて報告する．

PP217108　胃癌術後再発による消化管狭窄に対する金属ステント挿入の有用性

加藤憲治，田中陽介，近藤昭信，中川俊一，岡村一則，小坂　篤，水本龍二
(松阪市民病院外科)

【目的】胃癌術後再発による消化管狭窄に対しexpandable metallic stent (EMS) を挿入しその有用性を検討した．【方法】対象は7例（8部位）で幽門側胃切除術後吻合部狭窄4例，胃全摘術後狭窄3例（吻合部狭窄2例－1例はSchnitzler転移による直腸狭窄合併，Treitz靭帯近傍の小腸狭窄1例）であった．【成績】5例（71.4%）で5分粥～全粥が摂取可能となり，2例は退院，2例は腫瘍進展にて在院死，1例は5分粥が摂取可能となり転院した．無効例は2例で1例はEMS挿入部肛門側に狭窄が出現し，1例は逆流性食道炎が軽快せず経口摂取は改善しなかった．直腸狭窄例では良好な排便が得られた．【結論】EMSは安全で容易に挿入でき侵襲も少なくQOLの改善に有用であった．

PP217109　StageIII胃癌における術後化学療法の有用性について

田中賢一，金丸太一，小谷譲治，井上和則，田中基文，山本正博
(神戸労災病院外科)

【目的】進行胃癌の予後は不良である．今回，術後化学療法の予後への影響について検討した．【対象】1990年6月から1998年12月に手術を施行したStageIII, 69症例を対象とし，化学療法の有無による予後の差について検討した．【結果，まとめ】StageIII症例のうち術後，経静脈的化学療法を施行した症例は30例，施行しなかった症例は39例であった．経静脈的化学療法を施行したうちStageIIIa4例，StageIIIb26例であった．施行しなかった群ではStageIIIa19例，StageIIIb20例であった．経静脈的化学療法を施行した症例と施行しなかった症例との予後は，1年生存率は，施行した群93.1%，施行しなかった群73.1%，5年生存率は施行した群40.9%，施行しなかった群52.9%であった．術後早期の予後改善に化学療法が影響を及ぼした可能性が示唆された．

PP217110　進行胃癌（StageIIIA,StageIIIB,StageIV）に対する術前術後の化学療法の効果

渡辺佳香[1]，山崎慎太郎[1]，植田利貞[1]，望月文朗[2]，笠倉雄一[2]，藤井雅志[2]
(国立病院東京災害医療センター第一外科[1]，日本大学第三外科[2])

【目的】進行胃癌に対する術前術後の化学療法の有用性を検討した．【対照】1998年4月より2001年2月までの2年11ヶ月間の胃癌手術例153例中，StageIIIA以上の54例について検討した．化学療法を施行した25例と化学療法なしの25例を比較検討した．4例は今回の検討から除外した．【結果】化学療法群の術後平均生存期間は10.7ヶ月で，死亡例は4例であった．化学療法なしの25例の術後平均生存期間は8.9ヶ月で死亡例は20例であった．化学療法施行群で生存期間，生存率ともよい傾向がみられた．予後は化学療法群が良好であった．【まとめ】予後から検討すると積極的に化学療法を行うことが予後を改善することにつながる可能性が高いと考えられた．

PP217111　進行胃癌に対するPBSCT併用高用量化学療法と集学的細胞治療

上田祐二，藤木　博，原田佐智夫，井村健一郎，藤原　斉，岡本和真，阪倉長平，大辻英吾，北村和也，谷口弘毅，糸井啓純，園山輝久，萩原明於，山岸久一
(京都府立医科大学消化器外科)

EAP (VP16, ADM, CDDP) 療法施行進行胃癌症例を対象とし，抗腫瘍効果の増強と副作用の軽減を目的とした集学的細胞治療の可能性を検討し，その臨床応用を行なった．【対象・方法】転移巣を有する進行胃癌5症例を対象とした．標準的EAP療法後の造血回復期に末梢血幹細胞 (PBSC) を採取し，PBSCの免疫学的特性解析を行なった．1例に対して幹細胞移植（PBSCT）併用高用量EAP療法を施行した後，PBSC由来樹状細胞（DC）とCEAペプチドを用いたDCワクチン療法を連続的に施行した．【結果・結論】5例中4例で移植可能な十分量のPBSC採取が可能であった．腫瘍縮小効果はPR3例，NC2例であった．PBSC中には活性化単球が多量に含まれ，それらから臨床応用可能な大量のDC誘導が可能であった．また，PBSCTに引き続いてDCワクチン療法を連続的に施行する集学的細胞治療の適格性と有効性を確認できた．

PP217112　非切除・術後再発胃癌症例に対するChronomodulation chemotherapyの検討

小林　中，山口峰生
(社団桐光会調布病院)

【目的と方法】非切除・術後再発胃癌症例に対して副作用軽減と抗腫瘍効果増強を目的として，薬物動態のcircadian rhythmを応用したChronomodulation chemotherapy（CC）の有効性を検討．対象は非切除胃癌3例と術後再発胃癌2例で，tegafur 1200mg/body/day 1－7/i.v (800mg/body/16－24時＋400mg/body/0－8時)，CDDP10mg/body＋IV 25mg/body/16時/one shotを1コースとし4コース施行．【結果】非切除胃癌で2例MR, 1例NC，術後再発胃癌2症例で1例CR, 1例MRを得た．副作用は全例grade2以下だった．【まとめ】胃癌に対するCCは副作用が少なく有効性の高い治療である．

PP217113　Stage IV胃癌長期生存例における補助化学療法

青柳慶史朗，孝冨士喜久生，矢野正二郎，村上直孝，宮城委史，武田仁良，白水和雄
(久留米大学外科)

[目的と方法] stageIV胃癌の特に長期生存例について補助化学療法の延命への意義について検討を行った．1975年から1997年までに当科にて入院加療された旧規約上のstageIV胃癌637例を対象とした．[結果] 3年以上生存14例にP因子はなく，3, 4群リンパ節転移は3個以下であった．11例に免疫賦活剤が投与され，6例にMMC, OK-432，経口代謝拮抗薬の組合わせによる投与がされた．Nによる根治度C，非手術例の2例に少量CDDP, 5－FUが，HにCDDP, 5－FUの肝動注が行われた．[まとめ] P因子がなくリンパ節転移個数が少ない進行胃癌には免疫賦活剤を含めたMMC, 5－FU経口投与が，N因子には少量CDDP, 5－FU療法が，HにはCDDP, 5－FUの肝動注が延命に貢献すると考えられた．

PP217114　胃癌の腹膜播種に対する術中腹腔内免疫化学療法の遠隔成績

藤本敏博，張　　濱，高橋　豊，磨伊正義
(金沢大学がん研究所腫瘍外科)

【目的】胃癌の腹膜播種に対する手術時の腹腔内免疫化学療法の効果について検討した．【方法】手術時に腹膜播種陽性の胃癌101例と，腹腔洗浄細胞診陽性の漿膜浸潤胃癌治癒切除12例について，腹腔内治療内容によりMMC大量洗浄＋OK-432治療群，MMC大量洗浄群等に分類して術後成績を検討した．【成績】腹膜播種陽性胃癌では，カルボコン投与やMMC大量洗浄を施行した群 (n＝35) と比較してMMC大量洗浄＋OK-432治療群 (n＝42) の術後成績が良好であった ($p<0.05$) ものの，5年以上の長期生存例は認められなかった．一方，腹腔細胞診が陽性の治癒切除症例に関しては，MMC大量洗浄＋OK-432治療群（n＝5）が他治療群（n＝7）と比較して良好（$p<0.05$）であった．すなわち，他治療群は術後50か月を最長に全員再発死していたが，MMC大量洗浄＋OK-432治療群5例のうち，3例（60%）が3年生存し，2例（40%）が5年生存した．【結論】胃癌の腹膜播種対策として行う腹腔内治療にOK-432を併用投与するのは有効と考えられた．

NII-Electronic Library Service